



ながよ遺跡マップの
サイトはこちらから



注 意

- 遺跡には、足元が危なく、イノシシやサルなどの野生動物に出会うような場所があります。危険な場所へは絶対に行かないようにしましょう。
- 遺跡がある場所は、私有地である場合があるため、許可を得ないまま、むやみに入らないで下さい。
- 遺物を見つけても、持って帰らないで下さい。遺物の持ち去りや遺跡の破壊は法律で罰せられることがあります。

長与 遺跡録



～ 長与の遺跡
パンフレット ～

長与遺跡録 目録

旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡	1
堂崎遺跡	2・3
前田川内洞穴	4
その他の旧石器時代・縄文時代の遺跡	5～7
▶長与について①長与という地名の由来	8
中世の遺跡～城跡～	9
中尾城跡	10
浜の城（唾飲城）跡	11
東高田城跡、西高田城跡	12・13
その他の城跡	14
中世の遺跡～石塔群・館跡～	15
嬉里館跡	16
嬉里館跡五輪塔群（六部神）	17
丸田館跡	18
三根館跡	19
平木場館跡	20
古館の逆修碑	21
寺屋敷跡五輪塔群	22・23
▶長与について②長与村と高田村	24
近世の遺跡	25
横道教会跡	26
洗切陣屋跡	27
長与皿山窯跡、長与三彩窯跡	28・29
塩田跡	30
庄屋跡	31
横目役所跡	32
遺跡マップ・パンフレットの紹介	33

▶ 遺跡マップ・パンフレットの紹介

長与町役場2階にある生涯学習課で、当パンフレットのほかに「ながよ遺跡マップ」「ながよいせきクエスト～長与の遺跡パンフレット入門編～」を配布しています。

紹介した遺跡の場所が分かりますので、興味がある方はお手に取っていただくと幸いです。

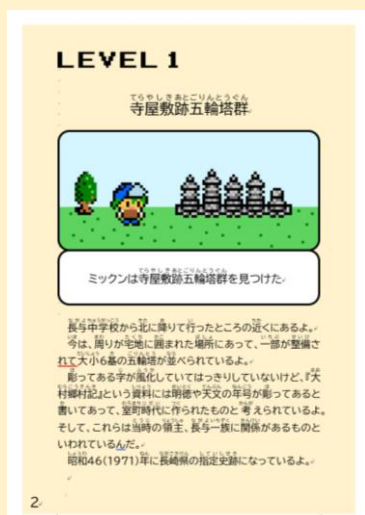
長与町ホームページにも掲載されています。

▶ ながよ遺跡マップ



▶ 表面はイラスト地図と一部の遺跡の解説があり、裏面は遺跡地図と遺跡の一覧があります。

▶ ながよいせきクエスト ～長与の遺跡パンフレット入門編～



▶ 長与を代表する4つの遺跡を紹介するパンフレット。レトロゲーム風のかわいいイラストによる長与町の遺跡を知るための入門書。



『長与町郷土誌』記載 字長福寺一帯

横目役所跡

横目役所の役割は、藩の命令を村に伝達し、村民に徹底させること、庄屋の監督、村の状況の報告、そして村の秩序維持などでした。

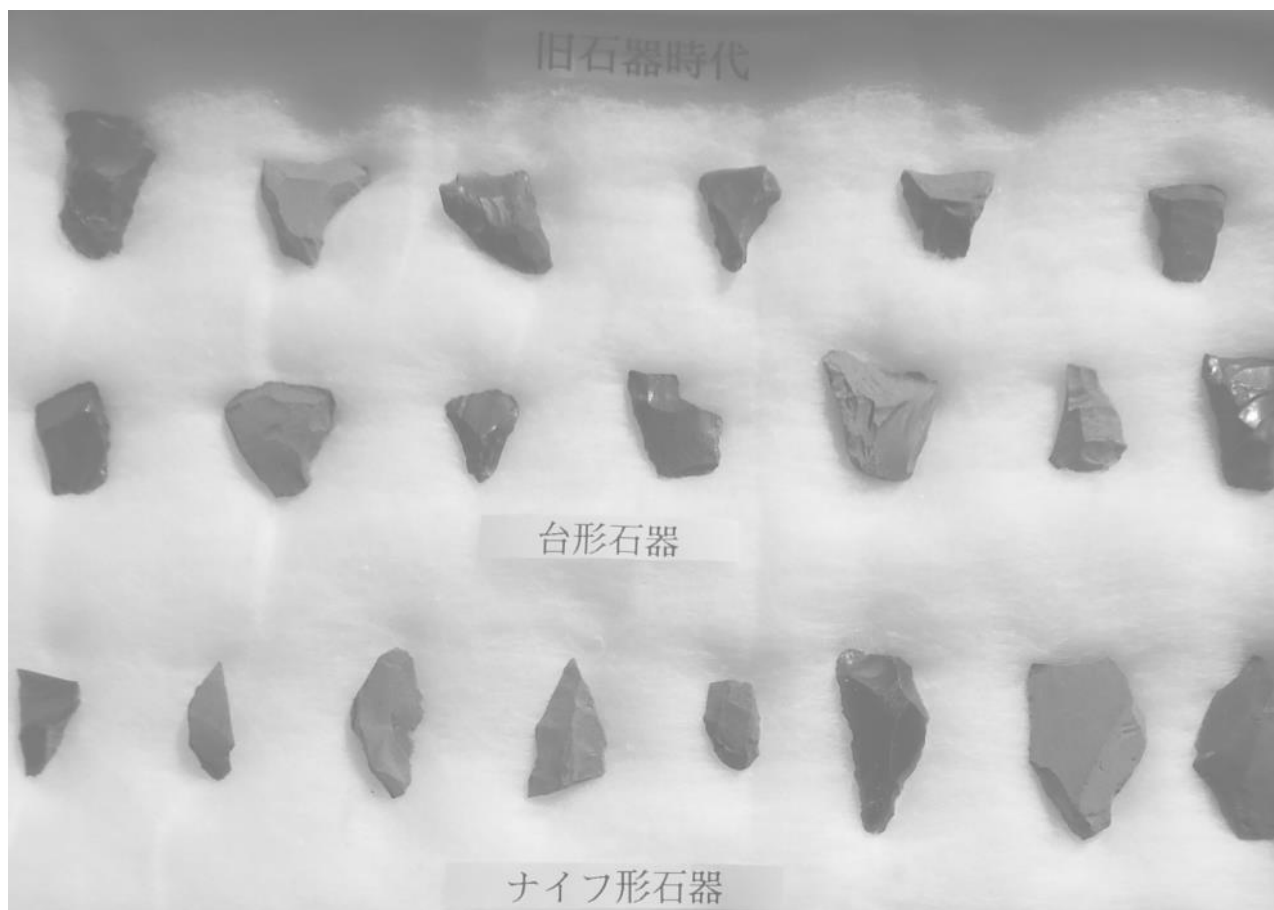
『大村郷村記』によると「長与村横目役場、先年は嬉里郷深町と言処にあり、文政六末年、船津番所兼帯となり、役所を同所に移し、一瀬為右衛門始て勤番河内嬉里郷横目役所引るなり 其後天保二卯年、猶又役所を長福寺と言処へ移し、横目湯川又之丞勤番、此時船津番所は引横目役所持込となるなり」とあるため、元々嬉里郷の庄屋の近くにあったものが、文政6(1823)年に番所(通行人や荷物・船舶などの検査や徴税を行う役所)と兼務することとなり、天保2(1831)年に齊藤郷のこの場所に移転しているようです。



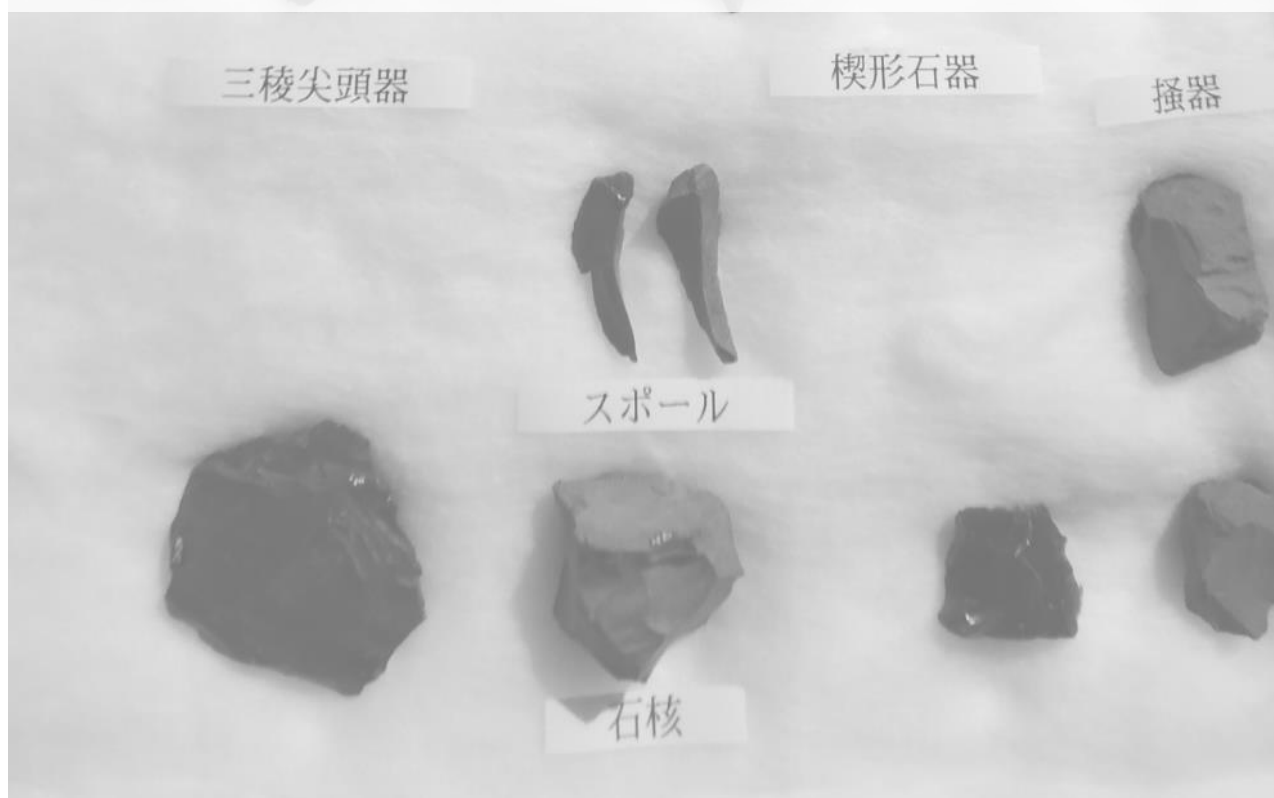
▶ 場所

岩淵神社近く、新浦橋付近が横目役所跡とされています。





旧石器時代・縄文時代・
弥生時代の遺跡





堂崎ノ鼻 遠景

堂崎遺跡

堂崎遺跡は町内最古で最大の遺跡です。岡郷の堂崎ノ鼻にあり、長与町の最北端にあたります。町内で最初にヒトが住み着いたのはここ堂崎であったと考えられており、旧石器時代から縄文、弥生、古墳時代と間欠的に長く続いた遺跡であることが分かっています。

○旧石器時代

多くの石器が出土し、おおまかに堂崎Ⅰ（約3万年～2万年前ごろ）と堂崎Ⅱ（約1万8千年前～1万5千年前ごろ）の2つの時期に分けられます。

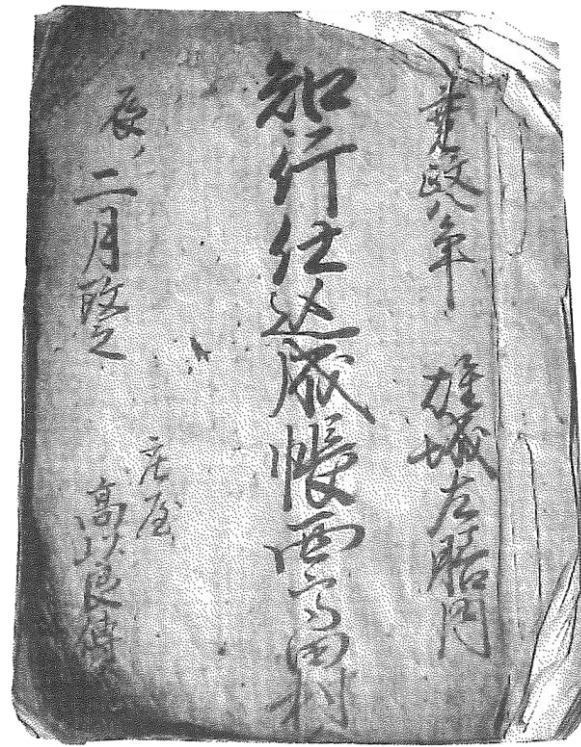
◆出土した遺物

〔堂崎Ⅰ〕台形様石器、ナイフ形石器、石核など

〔堂崎Ⅱ〕細石刃、細石核など

この頃、最終氷河期（ビュルム氷期）の極盛期で、寒冷であり現在とは自然環境が大きく異なっていたと思われます。特に海面は大きく低下し、大村湾には海水はなく大きな盆地でした。堂崎はその盆地を見下ろし、水も湧き出る格好の狩猟根拠地だったと考えられます。



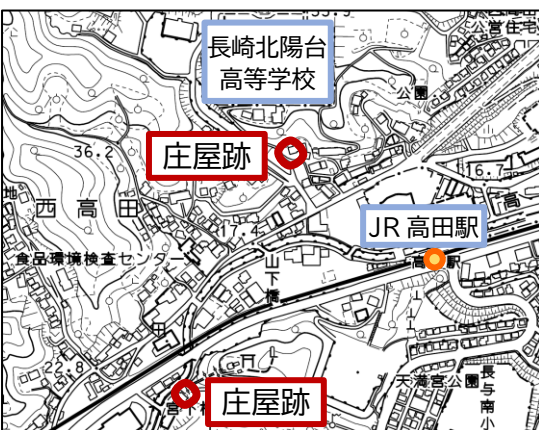


西高田の庄屋、
高以良家の
知行仕込成帳

庄屋跡

庄屋とは、江戸時代の村役人で、名主や肝煎などの別称もあります。村の長で村政を担当した現在でいう村長のような役職です。長与では手代と言われましたが、後に庄屋に統一されています。庄屋は有力な本百姓から選ばれていました。

長与村の庄屋は、長与小グラウンド辺り、高田村の庄屋は西高田と東高田にありました。



▶ 場所

・長与村庄屋跡

長与町役場近くの長与小学校グラウンド辺りにありました。

・高田村庄屋跡

西高田は長崎北陽台高校近く、東高田は天満宮（神社）近くにありました。





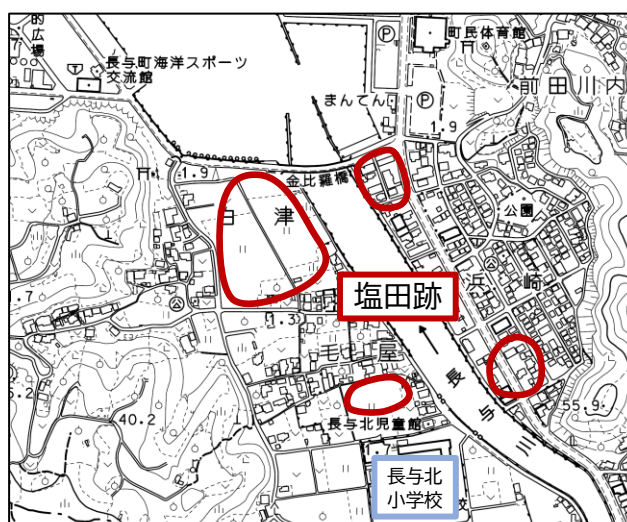
塩田跡



塩釜神社の祠

塩田跡

かつて長与村の代表的な産物の1つに塩がありました。大村藩内で初めて塩田が拓かれたのは長与村の浜で、『大村郷村記』によると慶長の頃(1596年～1615年)筑前国姪の浦の住人助右衛門という人が始めたとあります。その後は、田地になったり、近くに塩浜が拓かれたりと変転し、幕末の安政3(1856)年頃には、齊藤郷の解屋(毛屋)と岡郷の浜崎に新しい塩田が拓かれていました。明治38(1905)年に製塩は政府の専売事業となり、長与の塩浜は整理対象となり、大正初期に廃止されたといわれています。記録によると毛屋の塩田は国より補償金が交付されて耕地整理がなされ、現在では田畑や宅地などとして利用されています。



▶ 場所

長与小学校北側の川沿いや海岸近くの場所。齊藤郷毛屋白津、岡郷浜崎にありました。



○縄文時代

細かな文化期は特定できませんが、多くの石器が出土しており、石鏃(やじり)が最も多く、縄文時代の終わりごろみられる打製石斧や、同期の土器も多く見られます。

◆出土した遺物

石鏃、打製石斧、磨製石斧、縄文土器など

○弥生時代・古墳時代

数は少ないですが弥生土器(弥生時代中期ごろ)、須恵器の破片が出土しています。

◆出土した遺物

弥生土器、須恵器

▶ 堂崎遺跡から出土した遺物

旧石器時代



▶台形様石器



▶ナイフ形石器



▶石核

縄文時代



▶石鏃



▶打製石斧



▶磨製石斧

弥生時代



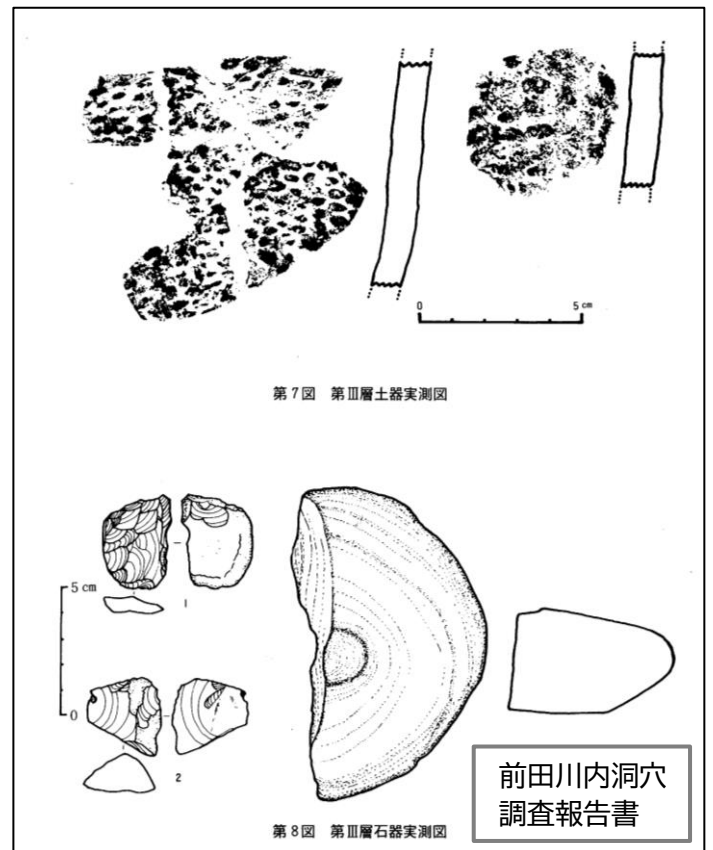
▶弥生土器



▶ 場所

国道207号沿いにある堂崎バス停から北側堂崎ノ鼻周辺になります。遺物が包蔵・散布された場所になっており、目に見える遺跡はありません。保育園横に駐車場あり。





前田川内洞穴

前田川内洞穴は、岡郷にあります。かつて「ぬすと岩」と称され賭博が行われていた場所で、昭和44(1969)年から昭和50(1975)年にかけて調査が行われました。所在地の標高は52mで、調査時の開口部の高さは60cm程、奥行は4m程、洞内奥部の高さは1.2m程でした。縄文土器14点が出土し、押型文土器が確認されており、町内で確認された最古(約8,000年前)の土器です。その他に石器が数点、搔器や凹石などが出土しています。

洞穴は押型文土器時代の短い期間に利用されていたとみられているため、生活の拠点ではなく、限られた時期のドングリなどの採集基地のような場所だったのかもしれません。



▶ 場所

中和田バス停より徒歩 30 分程度の場所にあります。里道や山道は整備されておらず、大変危険ですので、現地に赴くのはお止め下さい。



長与三彩についてですが、『大村郷村記』の中に、寛政4(1792)年、当村の市次郎という人物が、珍しい焼き物を焼いたので、畠2段を与えて他所に行かないようにとの記述があります。この焼物が、長与三彩を指すものと推測されてきました。長与三彩は、明確な制作年が不明であること、現存する伝世品の数が少ないこと、またその製法が不明なことなどから、“幻の長与三彩”と呼ばれています。

平成17(2005)年に実施した発掘調査では長与三彩の失敗品が出土しました。失敗品が出土するのは、生産地ならではの結果であるため、これによりますます長与三彩が、同地内で焼かれた可能性が高くなったと言えます。長与三彩は、長崎市内や大村市内でも少量ですが出土した事例がありますが、失敗品のような特殊な長与三彩は、長与町での出土事例のみです。

また令和7(2025)年には、長与皿山窯跡周辺地から色絵窯(赤絵窯)と推定される窯跡が見つかっており、長与三彩のさらなる究明が期待されています。

▶ 長与町民文化ホールに展示されている長与三彩



▶ 長与三彩
茶壺



▶ 長与三彩
香炉



▶ 長与三彩
涼炉



▶ 長与三彩
筒型花生



▶ 平成17(2005)の
年発掘調査で出土し
た長与三彩平皿破片



▶ 場所

国道207号沿いにある寺の下バス停から南、徒歩4分の場所にあります。

駐車場はありません。

※長与三彩窯跡は立入禁止。

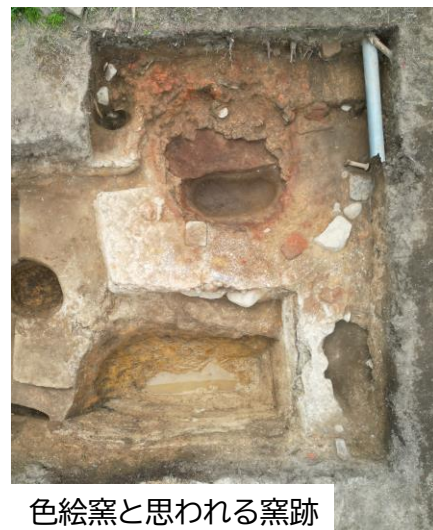




長与皿山窯跡



長与焼



色絵窯と思われる窯跡

長与皿山窯跡、長与三彩窯跡

長与町嬉里郷田尾に、現在も残る全長約115mの巨大な登り窯跡(長与皿山窯跡)は、寛文7(1667)年に浅井角左衛門・尾道吉右衛門・山田源右衛門・尾道長左衛門の願い出によって始まった長与焼の窯です。長与焼の操業は廃窯と再興を繰り返し、以下の3つの期間があったことが分かっています。

第1期 寛文7(1667)年～元禄5(1692)年頃

第2期 正徳2(1712)年～文政3(1820)年

第3期 弘化2(1845)年～安政6(1859)年

第1期は寛文7(1667)年に始まり、何らかの理由で廃窯していますが詳しい事は分かっていません。第2期は正徳2(1712)年に同じ大村領内の波佐見稗木場から太郎兵衛という者がやってきて窯を再興し、文政3(1820)年まで続いています。寛延元(1748)年には窯を拡張し、長与皿山の陶工が天草や愛媛の砥部に技術指導に出かけたほど繁栄していましたが、焼物の値段が下がり経営が難しくなったため、文政3(1820)年に廃窯しています。第3期は長与皿山出身の渡辺作兵衛が再興しましたが、それまでの操業に比べると規模は小さく、安政6(1859)年には廃窯し、長与焼の歴史は終わりを迎えました。

長与焼の多くは碗や皿などの日用磁器で、原料に長与で採れる中尾土が使われていました。中尾土は操業を中止していた時期に、諫早領現川の陶工達に売っている記録があり、良質なものであったことがうかがえます。

長与焼は長崎を中心に全国にも出荷されていました。「くらわんか碗」(大阪の淀川で酒食を売っていた小舟が使っていた器)としても利用されていて、淀川の川底から長与焼が発見されています。



その他の旧石器時代・縄文時代の遺跡

町内には堂崎遺跡、前田川内洞穴の他に、原始時代の遺物の散布地があります。

▶ 坪迫(なぎさこ)遺跡

旧石器時代～縄文時代の遺跡。
齊藤郷にあるが、場所の字は坪迫ではなく池堂。
過去の分布調査時に縦長剥片、ナイフ、
石鏃、石錐等が採集された。
平成24(2012)年に発掘調査が行われ、
石片が数点検出されたが、遺構は
確認されなかった。
場所は、クリーンパーク長与周辺。



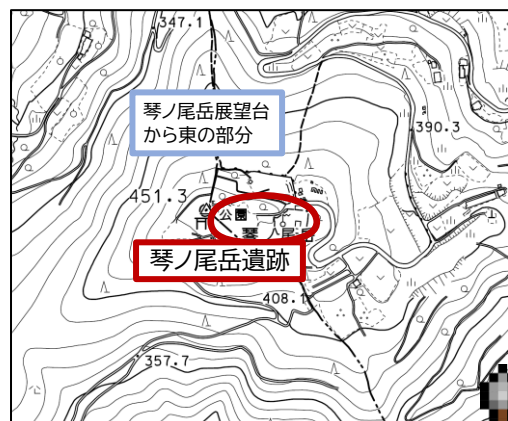
▶ 大堂(おおど)遺跡

縄文時代の遺跡。岡郷にある。
剥片、石鏃等が採集された。
場所は、大堂平バス停付近。
大堂川右側で遺物が見つかった。



▶ 琴ノ尾岳遺跡

縄文時代の遺跡。
本川内郷にある。
黒曜石石器等が採集された。
場所は、琴ノ尾岳展望台の
下の広場付近。



▶ 満永遺跡

縄文時代の遺跡。
岡郷にある。
石鏃、縦長剥片等が採集された。
場所は、岡バス停近く。
白髭神社裏手の丘陵付近。



▶ 山中川遺跡

縄文時代の遺跡。
岡郷にある。
磨製石鏃、黒曜石剥片等が採集された。
場所は、長与北部多目的研修集会施設からやや上がった周辺。



▶ 樽津(たるつ)遺跡

縄文時代の遺跡。
斉藤郷にある。
剥片、石鏃が採集された。
場所は、金比羅神社裏手の丘陵付近。



▶ 白津遺跡

縄文時代の遺跡。
斉藤郷にある。
黒曜石、サヌカイト片が採集された。
場所は、長与北小学校から西の方の丘陵付近。





洗切陣屋跡

平木場郷にあり、県道33号線長崎バス洗切停留所のすぐ近くで継場と呼ばれています。

江戸時代において、長与村は長崎往還の定助郷として、長崎奉行や諸国の大名が長崎往来の節は、村から人・馬・野菜・たいまつ・ぞうり・わらじなどを提供する定めになっていました。それらはここに集められ、人々はここで馬を乗り替えたり、のどを潤したりして、旅を続けていました。ここには、きれいな清水のわき出る井戸もありました。また、長崎に急変が起こった時などは、ここが大村藩士の集結地となっていました。

今でも昔を偲ばせる古い石垣やため池が残っています。



▶ 場所

洗切小学校の近くにあります。県道の近くにある石垣がある場所と創設時の洗切小学校跡地の2箇所が登録されています。





横道教会跡

昔から本川内郷横道に、中世のセナリヨかコレジヨの跡が残っているといえられてきましたが、文献上にも記録がなく、遺構なども見当たらないので定かではありません。場所は横道鉄道踏切付近の丘とみられています。かつてこの付近に礎石のような石が転がっていましたが、鉄道工事の土盛りのときなくなったとのこと（セナリヨもコレジヨも、キリスト教の教育施設で前者は今の高校程度、後者は大学程度の学校）。

昔時、長与にもキリスト教の信仰が広まった時期があり、特に本川内郷付近には、キリスト教信仰とかかわりがあると思われる言い伝えが他にもいくつも残っているので、キリスト教信仰上のなんらかの施設があったのではないかと見られています。この教会がいつ頃まで存在したかは定かではありませんが、慶長19(1614)年、江戸幕府はキリシタン禁教令を發布し、宣教師と主だったキリシタンの国外追放を命じています。



▶ 場所

本川内郷の JR 横道踏切の近くの畑が横道教会だったのではないかとされている場所です。



▶ 斉藤台地遺跡

縄文時代の遺跡。
斉藤郷にある。
サヌカイト片が採集された。
場所は、岩淵神社北西約 300m
の場所付近。



▶ 古園遺跡

縄文時代の遺跡。
嬉里郷にある。
石鏃、黒曜石剥片、サヌカイト剥片等が
採集された。
場所は、円能寺公園付近。



▶ 屋敷田遺跡

縄文時代の遺跡。
三根郷にある。
黒曜石剥片が採集された。
場所は、戸隠神社南、
戸隠神社バス停付近。



▶ 並吉遺跡

縄文時代の遺跡。
三根郷にある。
石鏃、石核、黒曜石剥片等が採集された。
場所は、三根寺周辺から県道にかけての
河岸段丘上。



▶ 長与について①

長与という地名の由来

日本の地名はほとんどが複数分布していますが、「長与」という地名は日本で唯一の地名です。

地名の語源は『長与村郷土誌』によると

- ①昔神功皇后が三韓役（※）の帰途、式見村に上陸して陸路長与村琴ノ尾岳で野宿されたが寒くて寝られなかったので「ああ長い夜だな」と言われた。それで長与といわれるようになったという。
- ②昔長与村は長い入り江になっていたらしい。それは二艘船とか立石とかいった名が残っていることや、貝がらなどの化石が出ること、または吉無田の部落名の起源などによっても、うなずかれる。それで長い入り江というので長江と呼び、これが現在の長与になまったのではないかともしわれている。

と2説が記載されています。

また、他にも

- ③「与」という漢字には土地や地域という意味があるため、「長与」は川沿いの細長い土地という意味で付けられた。という説があります。

①の伝承については真偽が定かではありませんが、地名の大部分は地形に起因することが多いため、②や③の説が由来かもしれませんね。

※三韓役

三韓征伐のことで、神功皇后が新羅に出兵し、朝鮮半島の広い地域（三韓）を服属下においたとする伝承のこと。





近世の遺跡

▶ 長与について②

長与村と高田村

かつての長与は、長与村と高田村(東高田村と西高田村)に分かれていました。長与村と高田村がいつ頃からそう呼ばれていたかは定かではありませんが、慶長10(1605)年、大村藩四十八か村制が布かれた時に、長与村から高田村が分村したことが分かっています。

また、現在は「高田」と表記しますが、かつては「神田」「幸田」と記されていたことがあります。

宝暦(1751年～1763年)の頃に建立の天満神社の鳥居には、「東高田村」「西高田村」と刻されている一方で、慶長17(1612)年の『諸士高帳』(大村藩の分限帳)には「神田」と記されており、また、文久2(1862)年に完成した『大村郷村記』には「幸田村」と記されています。

高田という漢字から、高いところを開いて作った田という意味を持っていると思われるが、高の字を縁起のいい「神」や「幸」の字に置き換えたのかもしれません。

長与村と高田村がいつから1つになっているかというと、『大村藩史稿』に「明治三年十二月二十三日、長与村に旧高田村を合す」とあるため、明治3(1870)年に長与村に合併されています。

合併後の長与村も南北に分割されていた時期がありますが(明治12(1879)年分割、明治13(1880)年再合併)、昭和44(1969)年に町制が施行され現在と同じ長与町となりました。





浜の城跡 遠景

西高田城跡 石垣



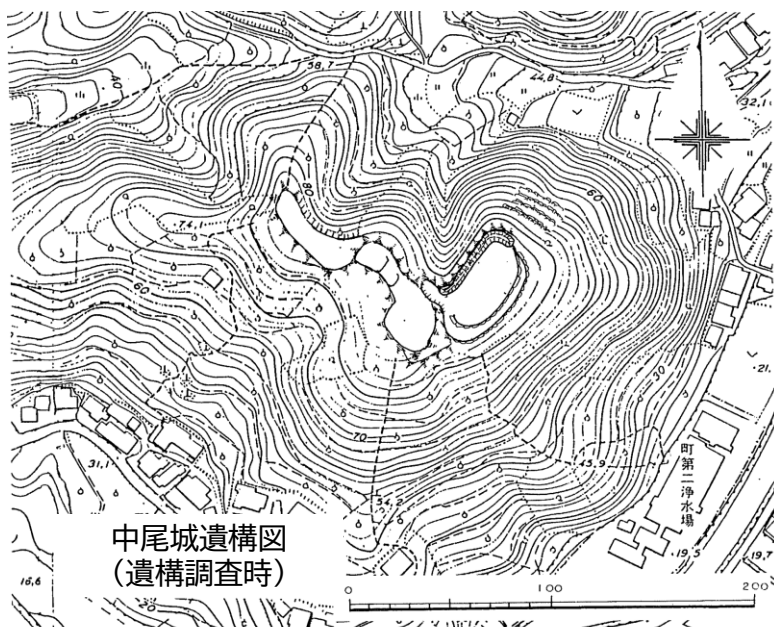
中世の遺跡 ～城跡～

東高田城跡 堀切り



中尾城跡 土塁





中尾城跡の概要

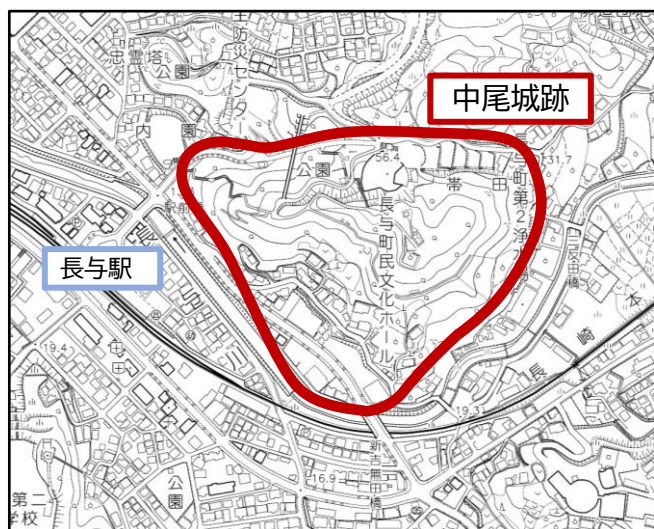
主郭標高：92m
 比 高：60m
 城 域：東西150m
 南北50m
 遺 構：主郭 二ノ郭
 三ノ郭(出郭)
 土塁 石垣
 竪堀 段築

中尾城跡《町指定文化財》

中尾城公園内の長与町民文化ホール上の標高92m程の高台にあり、城域は東西150m、南北50m程で土塁などが残っています。

『大村郷村記』によると天文の頃(1532年～1555年)に長与権之助が築いたとされています。長与一帯で万一のことがあった場合を想定して、非常時に備えることを目的に前もって築城されたものではないかと見られていますが、実際に非常事態は発生しなかったと言われています。

築城された時期は戦国時代中期で、長崎県内の戦国時代の城の土塁は、緊急で作られるため、構造が貧弱なものが多いとされるなか、中尾城の土塁は、平成4(1992)年に行われた発掘調査によると、土をたたき締めて幾重にも重ねるという本格的な造りをしていたことが分かりました。中世の長与を考える上で重要な文化財とされていて、平成10(1998)年に長与町指定文化財(史跡)になっています。



▶ 場所

JR 長与駅から徒歩15分ほどの場所にあります。

中尾城公園の駐車場がご利用いただけます。

土塁跡などがご覧いただけます。



また、近年新たに「允永禅尼 宝徳」など他にも文字が刻まれた地輪がみつかりました。

このうち「明德」と刻まれている碑銘は、長与に残る最古の金石文(金属や石に刻まれている文字のこと)とみられています。

碑銘の中には「禅尼」「禅定尼」とあり、男性優位の中世武家社会においても女性がきちんと遇されていたことが分かります。

碑銘の年号を古い順に並べると、明德2(1391)年・永享12(1440)年・宝徳(1449年～1452年)・寛正3(1462)年・明応3(1494)年・天文10(1541)年となり、室町時代(南北朝時代から戦国時代までの間)に建立されたことが分かります。これだけ多くの五輪塔が少なくとも150年間にわたって造られていたことから、かつての領主である長与氏に関係のあるものではないかとみられています。

このように古い時代の五輪塔がまとまってあるのは、長崎県内でも珍しい例で、大村湾沿岸における文化的資料の体系付けと、中世における石造物の貴重な参考資料となる史跡とみられています。



▶ 場所

長与町役場から北東方面へ徒歩5分、長与中学校から北西方面へ坂を下った近く徒歩5分ほどの場所にあります。

駐車場はありません。





近年新たに発見された碑銘

寺屋敷跡五輪塔群《県指定文化財》

五輪塔とは、供養塔や墓塔として用いられる仏塔の一種で、方形の地輪、円形の水輪、三角形の火輪、半月形の風輪、宝珠形の空輪で構成されます。

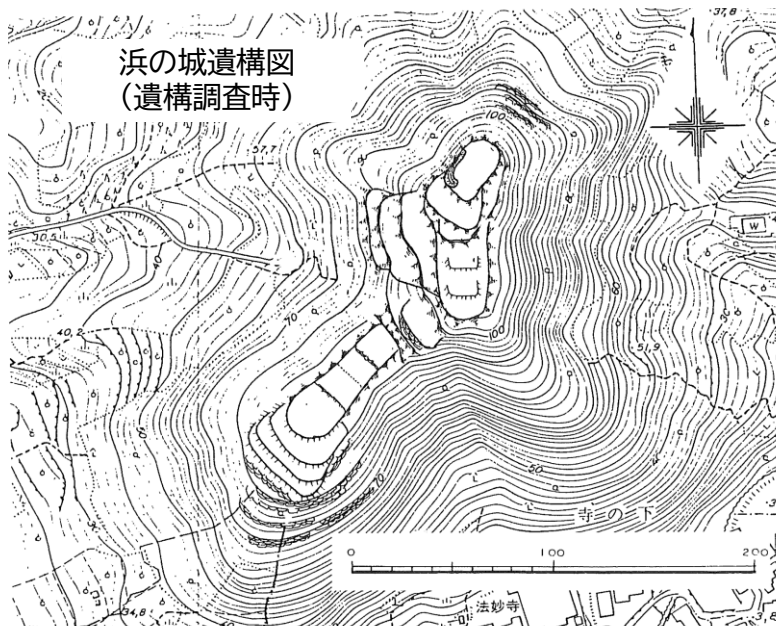
この史跡は、丸田郷の住宅地の中にあり、昭和46(1971)年に長崎県指定文化財(史跡)になっています。大小6基の五輪塔(五輪がそろっていないものもある)が並べられており、周囲に散乱している地輪から30基を超える五輪塔があったと推測されています。また『大村郷村記』には、「嬉里郷にあり、元禄旧記に、広サ五畝四歩程(約500平方メートル)とあり、今は蔵入畠なり」との記述があるため、昔はもっと広い別の場所にあったのかもしれませんが。

五輪塔の碑銘は風化していて判読が難しいのですが、『大村郷村記』に照らし合わせてみると、次のようになっています。

- ・暮齡六十八逝 禅智禅定尼 明徳二年辛未二月二十二日
- ・永享十二庚申年 天開珍公居士 正月二十三日逝
- ・逆修 現前智栄禅尼 于時寛正壬午二月吉日
- ・逆修 現前妙瑞禅尼 于時明応三年甲寅二月吉日
- ・謹奉造立石塔一基 祖円順公庵主 天文十年辛丑四月九日

※ 于時(ときに)とは、今現在という意味。





浜の城跡の概要

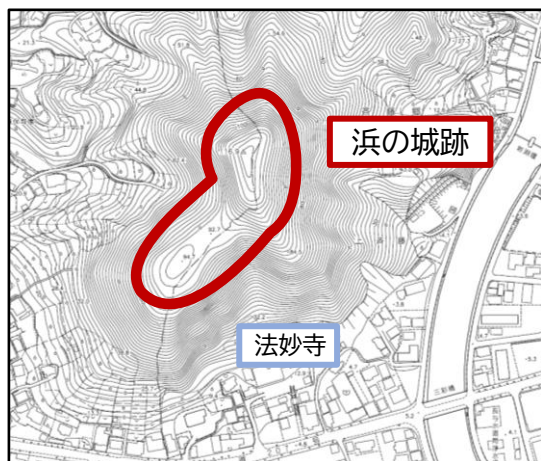
主郭標高：116m
 比 高：100m
 城 域：東西 70m
 南北 250m
 遺 構：主郭 二ノ郭
 腰郭 出郭
 堀切 段築

浜の城(唾飲城)跡

時津町との町境、斉藤郷の長昌山法妙寺裏手の標高116m程の山頂にあり、東西70m、南北250m程で、石垣や空堀などが残っています。

中尾城と同じく長与権之助が築いたとされ、浜の城と呼ばれていました。

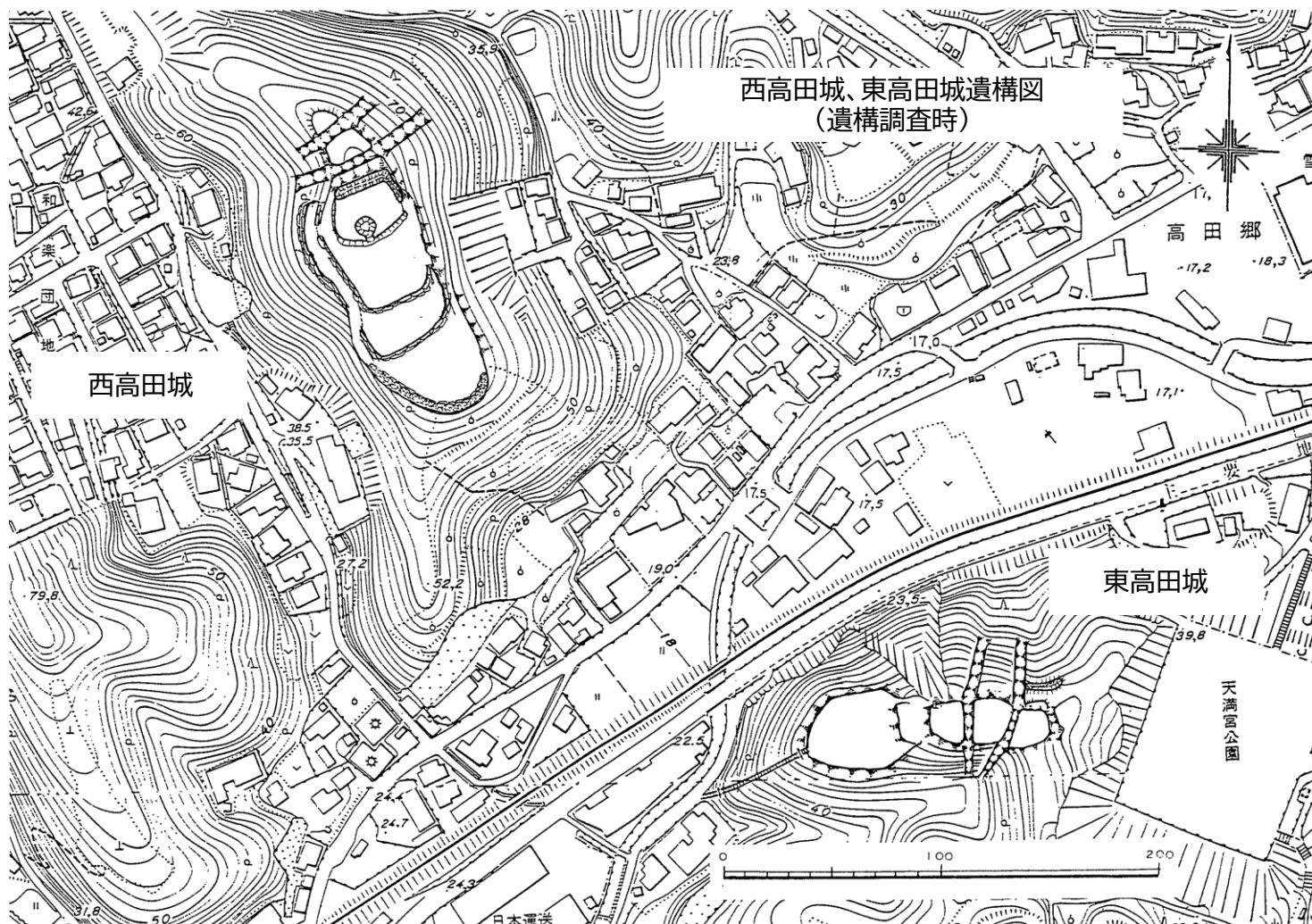
天正14(1586)年、地頭の長与純一が大村純忠に叛旗をひるがえし、この城に立てこもりました。これを知った純忠は、大村左近太夫純常を将とした50余騎の兵を派遣し攻め寄せましたが、城兵の鉄砲・石弓により防がれ苦戦します。急坂のため攻めにいく、喉がカラカラに乾いて攻めあぐねていたとき「梅干し！ 梅干し！」と叫ぶ声がして、この声を聞いた兵は、梅を想像して出てきた唾を飲み込んだため、喉の渇きが止まり士気が上がってついに城を落としたという逸話があり、この戦い以降、この城は“唾飲(つのみ)城”とも呼ばれるようになったと言われています。



▶ 場所

長昌山法妙寺裏手の山頂にあります。時津町側から途中までは登る道がありますが、山頂までの道はなく、大変危険ですので、現地に赴くのはお止め下さい。





東高田城跡、西高田城跡

○東高田城跡

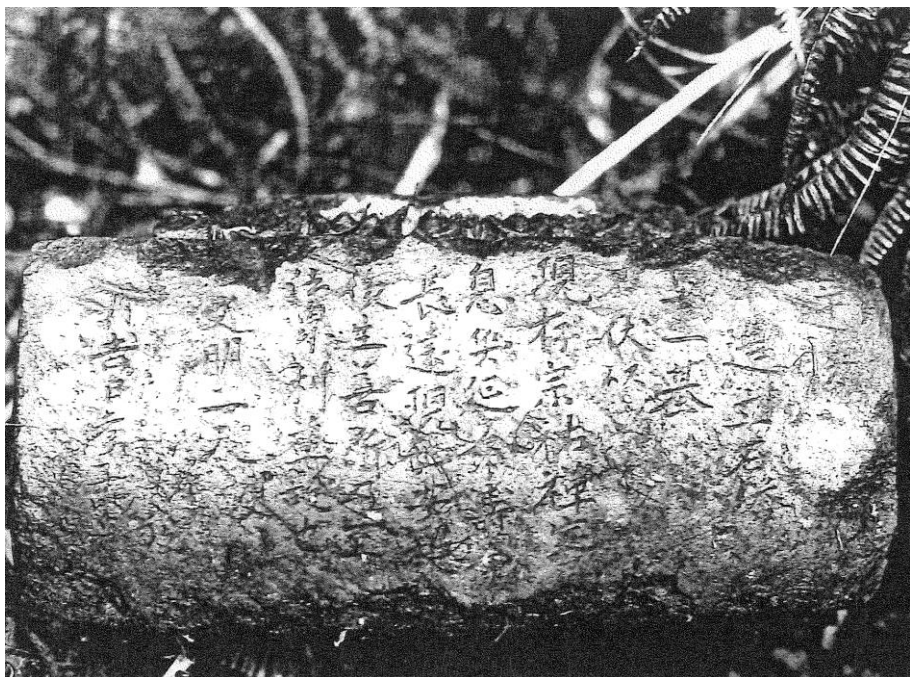
高田郷の天満宮の背後の丘陵にあり、深さ、幅共に7m程の堀切等が残っています。

この城跡の本丸は非常に狭いですが、この平場から高田川沿いの道路をかなり遠くまで見渡せます。そのため、この城で敵の侵入の監視し、対面する西高田城と一体となって防御にあたる役割があったと考えられています。

東高田城跡の概要

主郭	標高	: 62m
比	高	: 40m
城	域	: 東西 80m
		: 南北 50m
遺	構	: 主郭 二ノ郭
		: 三ノ郭 出郭
		: 腰郭 土塁
		: 堀切 豎堀





昭和56(1981)年の調査記録にある写真

古館の逆修碑

高田郷の長崎県立長崎北陽台高等学校の南西200m程の住宅裏手の竹やぶの中、古館の谷と呼ばれていた場所にあったのですが、現在所在が不明のものです。

詳細についても不明で、銘入りの台座があり、逆修 文明2(1470)年の文字があり、室町時代に造られた逆修のための石塔の一部であると見られます。

※逆修(ぎゃくしゅ)とは、生前に自分の死後の冥福のために仏事をする事。



▶ 場所

JR 高田駅の近くで、長崎北陽台高等学校の南西200m程の住宅裏手の竹やぶの中にあっ
たそうです。





観世音菩薩・水神様・
八幡大菩薩を祭った祠

平木場館跡

『大村郷村記』には「平木場と言処にあり、元禄旧記に、広サ畝歩にして一段四畝十二歩程とあり、今ハ在家二軒あり、此館往昔長与内記弟隼人と言者住ける由言伝」とあります。

場所は現在の山田橋バス停留所の近辺で、今は民家のほか畑になっており、畑のすみに、観世音菩薩・水神様・八幡大菩薩を祭った小さな祠が建っています。



▶ 場所

山田橋バス停近くの祠の付近
とされています。



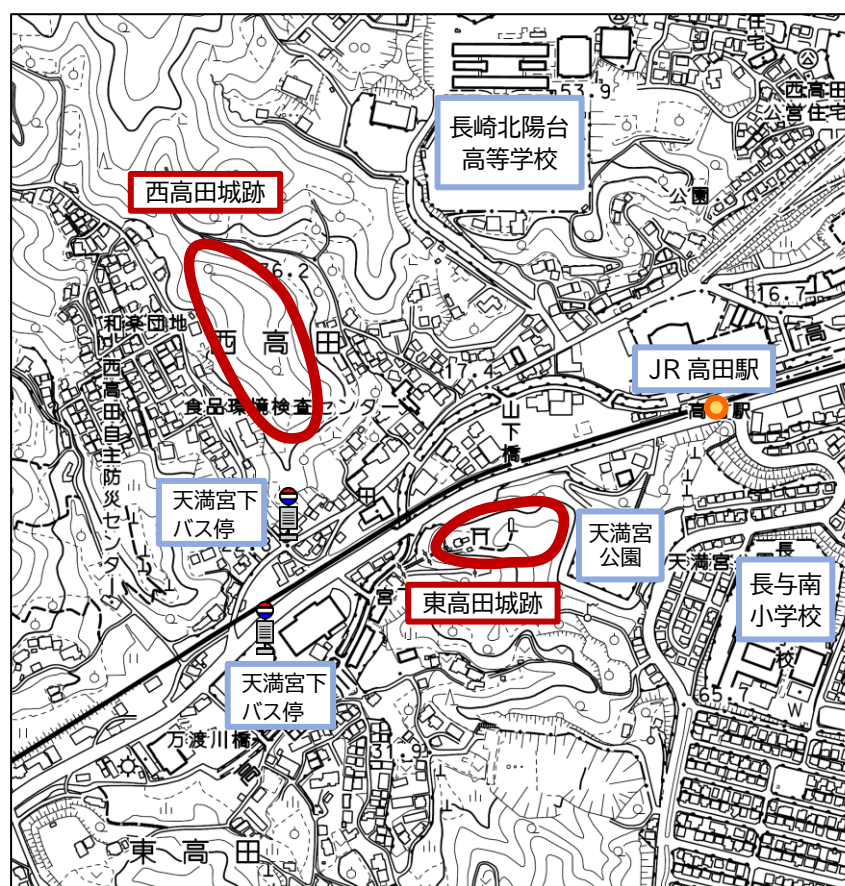
○西高田城跡

高田郷の和楽団地入口東側にあり、頂上付近にあります。

前述の東高田城と一体の関係にあったものと考えられており、この両城は長与の西の関門として、長崎方面に割拠した長崎氏、福田氏、深堀氏その他氏族の侵入を阻止する目的で築城されたと考えられています。

西高田城跡の概要

主郭標高：87m
比高：69m
城域：東西 50m
南北 150m
遺構：主郭 二ノ郭
三ノ郭 出郭
帯郭 土塁
石垣 堀切



▶ 場所

・東高田城跡

天満宮下バス停近く。
天満宮（神社）の背後
付近が本丸でその奥に
堀切りがあります。

・西高田城跡

和楽団地入口の天満
宮下バス停近くの丘
陵の辺り。
山頂までの道はなく、
大変危険ですので、現
地に赴くのはお止め
下さい。



その他の城跡

▶ 飯盛城跡

飯盛城跡は、嬉里郷と丸田郷の境に位置しています。長与町公民館の裏手の階段を登ると七面社が祭られた平場があり、ここが出郭と考えられています。そこから東の谷を隔てた丘陵の頂が主郭と考えられています。主郭部分は工事により削られており平場を失っていますが、帯郭(腰郭)の平坦部が残されています。

長与川や丸田川、南田川内川(昔は今の長与町役場付近で長与川と合流していた)の3つの川を外堀として利用し、丸田館跡や嬉里館跡、寺屋敷跡五輪塔群に近接していることから、長与氏の居城であった可能性が考えられますが、前述の4つの城跡と違い『大村郷村記』に記載がなく、詳しい事は分かっていません。



▶ 高尾ノ平城跡

高尾ノ平城跡は、丸田郷高尾ノ平にあります。

標高150m程の丘陵頂にあり、石垣等が残されています。

本丸と思われる部分は他の城のように水平部分がなく傾斜しています。丘陵斜面は急で、傾斜が急で川に囲まれていないため、丸田岳方向に領主一族を逃すための城だったのではないかと推測されています。

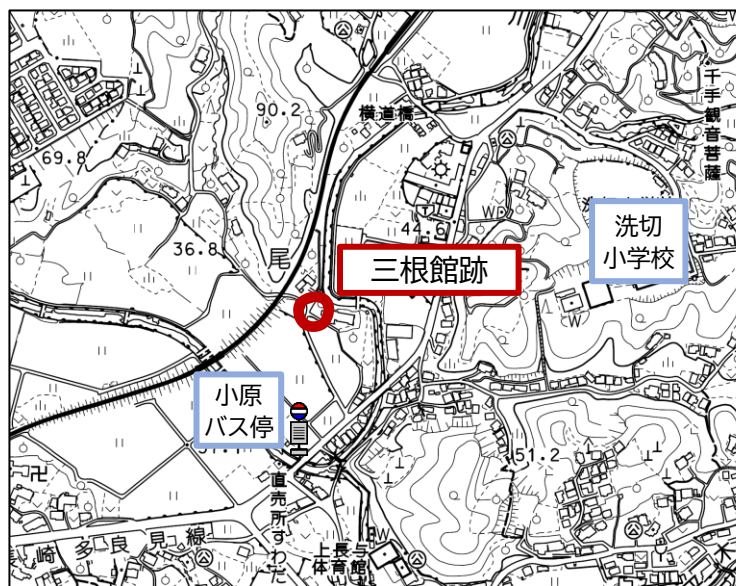




所在地と思われる場所付近

三根館跡

『大村郷村記』によれば「三根と言処にあり、元禄旧記に、広畝歩にして三段六畝程、北の方に泉水の形あり、南の方に隍(からぼり)二ツあり、長サ二十一間程、横ハ八尺程とあり、今蔵入畠と成て形ちも不分明なり、中央に三間四方程の塚あり、真中に墓あり、野石なり、北西の間に大河あり、此館は往昔長与軍助居住の由言伝」と記されています。現在ではこの館の所在地も明確ではありませんが、一説では、現在の洗切橋と鉄道線路の中間、田代踏切の付近ではないかといわれています。



▶ 場所

小原バス停近く JR 沿線田代踏切の付近と言われていますが、場所は定かではありません。





所在地と思われる
丸田谷公民館の付近

丸田館跡

『大村郷村記』によれば「丸田と言所にあり、元禄旧記に、広サ二段二十四歩、北の方に当て堀の跡あり(中略)此館は往昔長与軍助弟内記と言もの居住の由言伝、此所に内記の墓とてあり、墓の印ハ藪塚の内に温石にて笠石等舗石あり、又東西の間に大手門の礎石とて左右にあり、径り三尺位の平石なり、後に溪川あり」とも記されています。

丸田谷公民館の辺りにあったという話や、字開平の付近の現在畑になっているところに昔大きな平たい石が数多く敷きつめられていた場所があり、その付近の家々が「おまえ」や「つぼね」と呼ばれていて、それが領主一族のことを指しているのではないかと推測され、その辺りが館跡ではないかとの話など諸説ありますが、現在その所在ははっきりしていません。



▶ 場所

働く婦人の家近くの丸田谷公民館の辺りと言われていますが、場所は定かではありません。



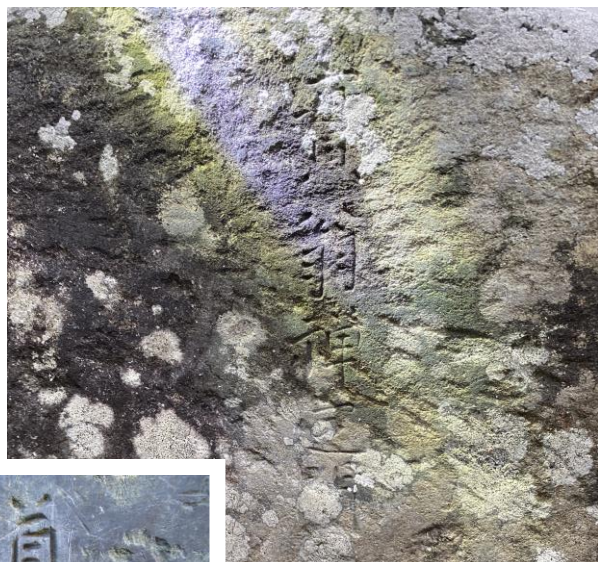


中世の遺跡
～石塔群・館跡～





嬉里館跡付近にある古井戸



嬉里館跡五輪塔群
(六部神)の地輪に刻
まれている碑銘

嬉里館跡

『大村郷村記』によれば「嬉里と言処にあり、元禄旧記に、広サ畝歩にして三段三畝程、此処に隍(からぼり)跡三ツあり、(中略)今は畠關と成り、(中略)此館跡に温石の石塔藪塚の内にあり、浄朝道順快營等の文字あり、永享八年の年号なり、館主及时代不知、此所に先年ハ温石に近江権守と記したる塔あり、今ハ無し(中略)此塔今宝円寺(※かつて大村に所在)境内本堂寺本堂の東の隅にあり、銘二曰、逆修近江権守藤原家継」とあります。この場所の近くにあり後述する「嬉里館跡五輪塔群(六部神)」の石塔の地輪には「道順」の碑銘があり、嬉里館跡との関係が認められます。また別の地輪には「實翁禅定門」の碑銘があります。

明治40(1907)年頃に館(たち)と呼ばれていた付近の荒地を開墾していたところ、刀・鎧・兜それに五輪塔の石塔群などが出土したことがあり、出土した鎧や兜などは川に捨てられたそうです。その後、その畑を耕作していた人達が相次いで象皮病にかかったため、これは発掘された鎧主のたたきだと言う人がいて、出土した五輪塔の石塔群を集めて祭るようになり、そののち象皮病も発生しなくなったとの話があります。

上記の話から「嬉里館跡五輪塔群(六部神)」を構成する多くの石塔群は嬉里館跡から出土したものと思われ、この場所がかつての領主である長与氏が居住した可能性が高いと考えられます。



嬉里館跡五輪塔群(六部神)

嬉里郷定林に祭られています。昭和5(1930)年、現在地から100m程離れた畑地からここに遷座されたもので、お告げにより六部神と名づけたと伝えられています。

石碑は民家の前の一画にあり、そこには六部神の石碑のほかに梵字の書かれた宝篋印塔や五輪塔などさまざまな石塔が置かれています。前述のとおり地輪に「道順」「實翁禅定門」の碑銘があるため、嬉里館跡にあったと言われている塔の一部ではないかと見られています。

六部神の石碑の側面には「元和九年十一月三日 日向国池田権右工門 田中権市 佐藤左工門」と刻まれており、言い伝えによれば、この3名は付近で戦没した落武者と言われている。



嬉里館跡五輪塔群(六部神)



▶ 場所

- ・嬉里館跡
定林橋バス停近くと言われているのですが、場所は定かではありません。
- ・嬉里館跡五輪塔群(六部神)
長与川沿いの道路から嬉里谷の方へ入り、右手の坂道を登ったところにあります。

